

新バベルの塔

— 目次 —

潜望鏡からの世界

美術館にて

ある「酔生夢死」病患者の一生

潜望鏡からの世界

雀のように

声 — 田村禎子さんに —

百パーセントの悪意

切りさかれた青空

聖パウロ上陸地 — ギリシヤ・ロードス島 —

島の日々 — ギリシヤ・イドラ島 —

ウエヌスの海 — エーゲ海にて —

アレンテージョ風景

切りさかれた青空 — ランス —

意識の扉

列島兄弟

意識の扉

役者たち

中立の思想

臆病者

海で見たのは

バトンリレー

種子

贈り物

海で見たのは

運命が連れ去るもの

新バベルの塔

彫像

新バベルの塔

限界を知る

忘却の国

マグマの下に

雀のように

前夜から降り続いた雨のせいで  
ベランダはまだ濡れている

手すりからは時々  
ぽたり　ぽたり　と

緩慢なリズムを刻んで　雫が落ちる

雀が一羽飛んで来て  
手すりの端にとまった  
しばらくは　何もなかったように  
まるでずっと　そこに居たように  
じっとしていた

やがて　気を許したのか  
手すりの中央に向かい  
横っ飛びに三步移動してみせた  
そして静止した一瞬ののち  
人間のように小首をかしげ  
目の前の部屋を　ガラス越しに覗きはじめた  
窓のこちら側の気配を認めたのか  
小さな頭を幾度もかしげる

だがどうして  
「人間のように」と思ったのだろう  
もしかすると　人間が  
「雀のように  
小首をかしげ」て  
いるのかもしれないではないか

島の日々 ―ギリシヤ・イドラ島―

港の船着場へまた 船が横付けされた

浅黒く屈強な男たちが 物も言わず荷を運び出していく

この島の交通手段はふたつ

ロバと 自分の足である

どこからひかれてきたのか 一頭のロバが

あらぬ方を見ながら

埠頭に積まれていく荷物を待っている

果たしてロバの背には

振り分けにした大きな袋が三組と

風呂桶がさかさまにくくりつけられた

尻を叩かれ ロバははっと我に返る

頭を振り振り 石の坂道を一步一步踏みしめていくその脇腹を

袋が振り子のように叩き

目には無数の蠅がたかっている

宿の庭のブーゲンビレアは満開

枝が ひしめく花の重みに耐えかねて

向かい合う窓の 格子同士を結んだ紐で

ようやく支えられている

むせかえるような紅色

紅を縁取る 葉の緑

青空

ただひたすらに明るく

ただそこに確かにあるもの

夕暮れに 日々繰り返される陽光の自殺  
燃えあがった海水がへびとなり

波に乗り 岸へ向かう

発せられる どんな言葉も意味をなさず

口元からこぼれ落ちた瞬間

意味の残照をとどめきれずに朽ちていく

島の沖合に停泊した船内では

世界的会議が開かれていた

議題は

人種の源流をほぼ等しくする者たち同士の  
虐殺行為 について

陽は海へ 滴っている

ウエヌスの海——エーゲ海にて——

真夜中 エーゲ海を渡るクルーザーの艦<sup>とも</sup>は  
じつとり湿った闇が支配していた

光を連れ去られた黒い海原にざわめく コールタール  
いや この海は光を失ったのではなく

光彩を海底に呑み込み

勝利に酔い 歓喜にさざめいているのだ

船底は触れているだろうか

あらゆる色彩が漂う 閉ざされた水の国に

忘れられた神々が杯を傾ける 暗きしじまに

水平線らしきあたりから

ぬう と現れた ネプトゥヌス

暗い水面を眺め渡し

「うまそうなものは ない」とばかり

また 沈んでいこうとする その時

私の喉をついて 投網が投げられた

「ワタシノ名前ヲ、呼ンデ！」

もうひとつの投網が呼ばれる

「イイエ、待ッテ、呼バナイデ！」

「ソツチへ、行キタイ！」

「行キタクナンカ、ナイ！」

せめぎ合いをよそに

ちゃぷり ちゃぷり と

波音

手すりをつかむ手が汗ばみ 滑る

(本当に滑った？ わざとではなく？)

床と手すりの隙間から

スローモーションで 体が溶けていく

「落ちテハ ダメ」

「イイエ 落ちテ シマイタイ」

船尾から闇に吸い込まれる

うしろ髪を残したままー

(これは夢？ それとも 求めた結果？)

水音！

その刹那

誰にも知られず 何も持たず

何も見えないまま

私は全てを有していた！

ゴボゴボゴボゴボ。

三千世界の果ての果てまで立ちのぼる泡に捕らえられる

全くの充足

無であることの至福

大熊座のひしゃくは

幸福の内に屍になった者たちを 汲み取るため？

## 中立の思想

ただ見えないだけで

そこら中に 電波が満ちている

植木鉢で咲くラベンダーに

机の上の写真立てに

バス停の時刻表に

犬が繋がれたくさりに

まとわりついている

目をかすめていく

マスコミユニケーションとは

目標など持たない 無味無臭の流れ

マスメディアは 忠実な拡声器

今日も明日も

元気いっぱい 働き続ける

「おう、君は新人だな。いいか、報道は中立に。要は、クレームが来ないように。政府の『大本営発表』なんかの場合、あはは、首相や官房長官の会見だよ、できるだけ生中継にすれば、あとで編集の責任云々を言われなくて済むからな。あとは・・・ん？フランスの元植民地の？ああ、これは関係ないな。中東は、石油関連くらいだ。あと、この国は敗戦、おっと、終戦以来、精神的植民地みたいなもんだから、宗主国のニュー

スは必ず押さえとけ。まあ、頑張れよ」

おそらく中立の思想を持った ある日のTVニュース  
「今日、大人気のゲームソフトの新作が発売に  
なり、朝早くから、各販売店で長蛇の列ができ  
ました」

同じ日のローカル局ニュース

「昨日、戦時中の防空壕跡から、約三十体と見  
られる白骨が発見されました。当時の行方不明  
者と思われます」

言葉も映像も 決して無力ではない  
ともすると 伝えようとした意図以上の  
ゆらぎも闇も伝達してしまう  
けれど

言葉を選ぶ者が  
ゆらぎの正体を見つめず  
受け手に分析をゆだねる時、  
映像を切り取る術の無い者が  
闇に動くものをとらえず  
受け手に判断をまかせる時、  
それらは  
空気中に ただ拡散していく粒子に変容する

そしてメディアは ネズミになる  
十二支のかけっこで  
ネズミは 先頭を行く牛の背に乗り

ゴールで さも 一番で駆けてきたかのように  
牛の前に降り立った

メディアは

人の意識への無賃乗車を繰り返しながら

巨大なネズミになつていく

現在は あらゆる情報が「ハッシン」されているらしい  
ただ見えないだけで

情報は そこかしこに満ちているらしい

「・・・という情報がある、という情報がある、という・・・」

延々続くこの連鎖

缺で 断ち切ってやろうか

今日も 町のどこかで

真面目で純粋な人たちの

善良な誤解が自らに書かせた

「すべての情報を 享受できているはず」

というタイトルの悲喜劇が

アンコールされ続けている

臆病者

ヒトは

犬 猫 馬

セミ トカゲ スズムシ

竜胆 薔薇 石楠花

くじら 鰯 ヒトデ

山 空 大地 が

してほしいこと を わかろうとしたり

わかったつもり に なったりする生きもの

でも 同じように

してほしくないこと

も わかるので

もつとも残酷ないやがらせ

も できるのです

もちろん ヒト同士もお互い

してほしいこと してほしくないこと

が わかるわけで

自分がしてほしくないこと を

相手が知っている と 察した時

それまでの自分を振り返り

恐怖することにもなる

だからヒトは

地球の生きもののうち

いちばんの

臆病者なのだ

## 新バベルの塔

またひとり 王様が生まれたようだ

真っ赤な顔で不平を鳴らしつつ

赤ん坊は天下を取ったも同然

お腹が空けば手足をばたつかせ

お尻が濡れれば泣きわめく

一歩たりとも動かずに

大人たちだけ右往左往

「アーハハ、オモシロイ、ミギムケーミギ！」

だがある日、赤ん坊は気づく

「アア、天下ガ崩レテイク。体ガ大キク

ナルニツレテ、崩レテイク。

ドウスレバ、クイトメラレル？」

世界中に散らばる元・王様たちは

天下の崩壊をくい止めるための

素晴らしい装置にすがりついた

コンピューター

口を動かさずともできる

対遠隔地コンタクト

四畳半の部屋からでも

すべてを見渡せるインターネット

至福の時

赤ん坊の天下が戻って来た！

目障りナモノハ 跡形ナク排除セヨ

言ウコトヲ聞カナイ者ハ 無視セヨ

純粹無垢ナ 天ニ届ク塔ヲ作ルノダ

ミンナデー緒ニ

ヒトリヒトリデ

同ジ形ノ

別々ナ塔ヲ作ルノダ

赤ん坊の天下が戻って来た！

限界を知る

フワフワの巻き毛は

お母さんゆずり

可愛いドリーちゃんは

生まれた時から注目の的

「ほら、あの後ろ姿なんか、

母親にそっくり」

ドリーちゃんの体は

赤ん坊の時から 年を取っている

「何だか、かわいそう」

「いやあ、『役に立ってるんだから本望』、  
なんて思ってたりにして」

「まさかあ！ クローン羊が？」

二千年の昔

人類の贖罪の生贄として

神に捧げられるべく生まれついた

ひとりの「神の仔羊」は

「よき羊飼い」と呼ばれた

二千年後の今

「よき羊飼い」が愛し 導こうとした

「迷える仔羊」たちは

とめどなく増えつづける

ヒトは 発生以来一貫して

「自然」に屈せず

順応する以上に

征服することを欲して 邁進してきた

削られても崩れても

また積もり続ける欲望の砂丘に

滅菌作用を持つ青かびが繁殖し

遺伝子を組み換えられた大豆が青々育つ

もつともつともつと

まだ足りない 何か もつと

仔羊たちの希望と願いを一身に受け

立派に成長し続ける科学くんは

要求に応えるため わき目もふらず自瀆行為

文明の端で科学者たちの

文化の端で遺伝子の―地球の―

優秀な私生児たちが 輪になって踊る

染色体二十三番で

「人間の設計図」による

人生最初の振り分けをされた人たちが入り交じり

設計図を解きあかすため ロッククライミング

経済大国もそうでない国も

仲良く足をひっぱりあって 大研究

科学者は プライドと研究業績のために

そして人類のために（―おそらく―）

為政者は 経済効果と名誉のために

そして人類のために（―おそらく―）

家族や友人や　もちろん自分が  
痛ましい　遺伝的疾患を持っていたなら  
どう見積もっても足りない　命の期限に覚醒したなら  
それに対処できる術があるなら  
「自然」に屈せず　征服するため  
踏まないとは限らない  
自転車操業のペダルを

「ヒトゲノム」を持った  
ほかの多くの仔羊たちもきつと

こんなにか弱い仔羊たちが生み出した科学には  
永遠に到達できそうもない　終着点がある  
おそらく　それは  
「限界を知る」ということ

## マグマの下に

人間の内側には　マグマが詰まっている

煮えたぎる液体が　隙を見ては

噴出しようと待ち構える

口から

目から

脳みそから

言葉という溶岩を地表へ転がし

視線という泥流を大気中に注ぎ込み

思考という水蒸気を噴き上げる

活火山

マグマの熱で

消滅寸前まで消毒された内臓

あるいは不具合から

中途半端な熱であたためられ

腐りかけた内臓

「内臓をうまく噴出させたいなら

アルコールランプで注射針をよく消毒して

瀉血すればよろしいのです」

誰かが　訳知り顔で断言する

おや　皆いっせいに針を持ち

アルコールランプに火をつけた

考えない代わりに疑いも無い 気持ち良さを抱いて――

先の誰かが言う

「上手にやるコツは

とにかく皆で一緒にすることです」

活火山からほとばしった液体は

時間に切り取られ さらされて固まり

形状をあらわにするが

ごつごつしたそのかけらは

マグマを孕んでいながら

マグマを遥かに去っている

乳兄弟も袖振り合う仲も

同僚も恋人同士も

思い思いにかけらを手に取り

記憶回路にデータを書き込むのが習わし

(思ったより丸いなあ)

(随分細かく砕けてるわね。)

この人、案外神経質なのかしら)

ああ マグマは

孤独な流動体なのに

とどまらず 苛立ちながらつねに

外気との接触を待ちのぞんでいるのに

その下には

清冽な地下水脈をはらんでいるのに